東北地方の奥地山村におけるゼンマイ生産地域の形成  明治後期から大正期における奥地山村の商品経済化の一類型として

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>池谷 和信</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>人文地理</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>1989-04-28</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10502/5628">http://hdl.handle.net/10502/5628</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
東北地方の奥地山村におけるゼンマイ生産地域の形成
——明治後期から大正期における奥地山村の商品経済化の一類型として——

池谷 和信

I はじめに

(1) 研究の目的 明治後期から大正期にかけての産業革命期には、資本主義経済の拡大にともない、日本の農山村社会は大きな変貌を余儀なくされた。明治20年代（1887～1896）後半以来、戦後の高度経済成長期ほどではないにしても農山村からの人口流出が進み、東京、大阪などの都市人口は急激に増加して都市圏は拡大し1)。それにともない、都市から離れた奥地山村では、商品経済の受容のあり方により地域分化が生じている。

育成林業による木材生産を主とする山村は、明治中期以降の産業革命の進展につながる木材需要の増大の中で、静岡県天竜川流域、愛知県設楽地域、德島県木髪地域、山形県金山地域、熊本県小国地域、愛媛県久万地域などに形成された。また、木炭生産の卓越する山村は、都市を中心とする木炭需要の増加や交通条件が整備されて、木炭輸送体系が遠隔地へと伸びたことにより、北上山地、阿武隈山地、中国山地、四国山地、九州山地などに形成された2)。つまり、都市からの交通の便が比較的街ある高原状の山地や各地の山脈の周辺部では、日本の山村経済の中心といわれた製炭業の発達をみた。

しかし、市場への道路をもたない奥地山村では、育成林業や製炭業はあまり発達しなかった。むしろ、山地交通の制約から軽量で運搬保存に便利で、しかも高価な商品が生産された。蔵、三権、山茶などである。

例えば、石川県白峰村では、山村住民が自給食料の穀物類を確保するために焼畑農業を営む一方で、焼畑の跡地に山桑を栽培して桑葉を営み現金収入を得ていた。こうした出作り地での山桑栽培を背景として、末で萌芽をみた製炭業は、明治11年（1878）に白峰製炭社の設立をみるまでに発展し、明治中期にかけては、白峰に3工場、桑島に2工場が加えられた3)。このように、白山山麓の白峰村の経済に製炭業の果たして来た役割は大きく、同じ山麓の打波地

1) 伊藤 繁『明治大正期日本の都市成長』 数量経済史論集3 プロト工業化期の経済と社会、1983、305—336頁。
2) 田崎武夫『日本都市の発展過程』 弘文堂、1965、379—439頁。
3) 藤田佳久『林業—育成林業の地域形成とその分析—』（伊藤真平ほか編『新訂経済地理』、大明堂、1977）286頁。
4) 松岡利夫『植林民俗史』（日本民俗誌大系第3巻中国・四国）、角川書店、1974、50—51頁。とすると、山口県植林村では、明治30年頃から製炭業が発達し、それ以前は、木炭の消費が増えて、木炭の需要が少なかったため炭を焼かず炭を焼いていた。
5) 藤田佳久『林野と村人』（付枝加良編『人文地理学総論』）朝倉書店、1984、120—134頁。
6) 千葉信之『原始山村の変遷過程』 地理学評論、23—150、によると、職業としてはたわが成立したのは、関東や近畿の市村に近い山地で、しかも明治中期以後のことであるという。
7) 田中啓爾・田幸清喜『白山山脈に於ける作業地帯』地理学評論、3—4、5、1927、281—298・382—396頁。
8) 矢崎孝雄『白山山脈白峰村における明治大正期製炭業の変貌』 历史地理学論集 2、1960、123—154頁。
9) 今川利夫『焼畑経営山村における林野利用と村落構造』 人文地理、21—6、1969、575—600頁。
10) 矢崎孝雄『白山山脈白峰村における手作りの実態』 石川地理、1、3—14頁。
11) 白峰村史編纂委員会『白峰村史 上巻』 白峰村役場、1962、125—126頁。
方や越中五箇山、能郷白山麓の徳山村、御岳山周辺の開田村、苗場山麓の秋山、伊那の遠山、富士山麓忍野村などの中央日本の奥地山村でも同様である。ただ、比較的交通の便なに乗鞍火山麓の番所では、明治後期から製茶が盛んになり、養蚕は製茶に次ぐ現金収入源であった。

一方、西日本外帯の奥地山村では、九州山地の五木、五家荘の茶山栽培、四国山地の樫の三桝栽培のように、山地での焙煎農業と強く結びついた生業が発達した。例えば五木では、焙煎の跡地から自生する山茶が商品となり、製茶業の発展をみた。これは、大正初期以来全国的に茶業地域に浸透した製茶の機械化の波が九州山地にも及び、五木村にも大正2年に製茶機械が導入されたためである。また、樫を含む土佐の焙煎山村では、明治20年代から地租改正後の廃弊した山村農民を救う商品作物として三桝が急速に広く栽培され、明治30年頃から本格的な栽培が行なわれるように至った。

これらのことから、中央日本奥地山村では養蚕業が発達し、白峰村のようにそれが焙煎農業と結びついている所もあるのに対して、西南日本の外帯の山村では、樹木農業が焙煎と結合したといえる。けれども、東北日本の奥地山村では、焙煎農業が伝統的に行なわれていたにもかかわらず、一部の地域を除いて焙煎と商品作物が結びつくことはほとんどなかった。むしろ、広大な林野を背景にしたゼンマイ生産が、奥地山村の経済基盤の一つとして成立していた。しかし、従来の研究ではその点については検討されてこなかった。

そこで本稿では、東北地方のゼンマイ生産地域の分布と形成過程を明らかにすることを目的とする。併せて、その結果を通して、薬、金、三桝、茶山などの商品にゼンマイを加えることによって、明治後期から大正期の奥地山村における商品経済の発達の地域分化に関する知見をより完全なものにする。

（2）ゼンマイの商品化に関する従来の見解ゼンマイは、韓国、プーテなどの他にわが国でも古くから珍重されている山地資源で、「山菜の王様」と呼ばれる。例えば千手ゼンマイは、保存ができることと携帯に便利であることから、上杉謙信はこれを陣中食に用いたという。新潟県魚沼地方では「ゼンマイ煮物」と称して、

8）大西青二『打波地方における出作りとその衰退』、地理学評論、32—2、1959、32頁。
9）松井澄樹『山の変容過程——越中五箇山の場合』、人文地理、7—1、1955、6頁。
10）徳山村史編集委員会『徳山村史』、徳山村役場、1973、579—581頁。
11）野上男男『鉄地地理研究所『御岳・乗鞍周辺の地域』、二宮書店、1969、81頁。
12）市川健夫『長野県中津川渓谷八山地の地域構造』、文献、5—9、1953、538頁。
13）上村民俗誌刊行会編『南州村・上村遠山の-margin』、上村民俗誌刊行会、1977、142—147頁。
14）古島敏雄『山地の構造』、日本評論社、1949、104頁。
15）市川健夫・白坂義『乗鞍火山東麓の山地集落の変貌』、新地理、26—1、1978、2頁。
16）佐藤信昭『一幅のすかた』、五木村、1953、46頁。
18）上野和雄『五家荘の焙煎栽培』、地理学評論、14—2、1938、101頁。
19）松本百三『九州山地五家荘の地域構造』、地理学評論、31—1、1958、155頁。
20）福井勝義『焙煎の村』、朝日新聞社、1974、139頁—144頁。
21）山本正三『九州山地における茶山の利用形態——熊本県五木地方の例』、地理学評論、30—4、1957、275—289頁。
22）坂本正夫・高橋英夫『日本の民族39高知』、第一法規、1972、52—54頁。
23）横川尚喜『高知県の焙煎栽培』、人文地理、4—2、1952、59—67頁。
24）相馬正松『四国山岳地方における焙煎農業の地域構造』、愛媛大学紀要、社会科学4—1、1962、21—22頁には、焙煎の基幹作物が三桝におかれている点に四国地方における焙煎の特異性が見出されることを述べられる。
25）佐々木高明『日本山の焙煎』、古今書院、1972、139—130頁。
26）ゼンマイは、北海道から九州まで、さらにアジア東部に広く分布し、奥山の急傾斜地に大群落をつくるシダ状の1種である。その点、里山の山地に群落をつくるシダとは対照的である。
27）今村信一『調理法と食習慣』、世界の食べもの週刊朝日百科、朝日書房、1982、237—243頁。
28）西岡里子『プーテの料理』、世界の食べものの週刊朝日百科、ヒマラヤ、1981、268—272頁。
東北地方の奧地山村におけるゼンマイ生産地域の形成（池谷）

振舞い時や産婦の産屋まかなには欠かせない
ものとして古くから賞味されてきた(25)。また、古くから冬期の保存食料としてきた集落も多く、
東北のゼンマイ採集は、生活に欠かせない生業の
一つである。なお、干ゼンマイには赤干と青
干の二種があり、赤干は山奥から採集された生
ゼンマイを一度熱湯で沸騰しをして天日で乾燥したもので、青干は湯通ししたものを火床で
いぶして蒸蒸したものであり、前者は一般お
炊業用として大阪で珍重され、後者は寺院関
係の多い京都、奈良方面で主に精進料理に利用
されてきた(26)。

これまでゼンマイは、山村地理学、生態人類学、
あるいは山村振興のための行政の側などか
ら注目されてきた。なかでも三井田は、経済的
側面から初めてゼンマイ生産をとらえ、高度成
長期以降ゼンマイの産地価格の上昇にともな
ほしい産地住宅の所得水準が高まり、その結果、事
例として東北地方の豪雪地帯に位置する奥地山
村では、過疎化が進んでいないことを指摘して
いる。その後、この見解は、福島県、石井・山
本によって支持され、丹野もヒトと自然との関
係を把握する中で、江戸時代におけるゼンマイ
とワラビの量は、現在のように大きな規模のも
のではなく、山村における種々の副業によるさ
まざまなる生産物の一つにすぎなかったのであろ
うと指摘しながらも、ゼンマイの商品化に対し
ては三井田氏の見解を踏襲している。すなわち、
ゼンマイは高度経済成長期の山菜ブームともし
に商品としての価値が高まり、それとともに東
北日本の奥地山村における経済的基盤となった
というのが、従来の一般的知見である。

しかし、従来の研究の調査地は、新潟県朝日
村三面（みおもて）、同県上川村室谷、福島県只
見町入山（いりかのうず）、山形県小国町五味
沢と長者原の5地点に限定されており、それら
以外のゼンマイ生産集落（以下、筆者は、ゼン
マイ生産が村落の経済的基盤を構成する集落を「ゼン
マイ集落」と呼ぶ）は明らかにされていない。ま
た、ゼンマイ生産の考察時期が主に戦後に限ら
れていた点も指摘できる。これは山菜の生産統
計資料が乏しいために、集落レベルでは正確な
量を知ることが難しいためである。そのためゼ
ンマイの生産と出荷量の把握には、現地での詳
細な観察や聞き取り調査を行なう以外に方法は
ない。それを通して、ゼンマイ集落の広域的分
布が明らかになり、そこでのゼンマイの商品化
の時期をめぐって三井田の見解を再検討できる
と考えられる。

筆者は、1981年8月から1984年10月にかけて
延べ50日間ほど、東北地方や北陸地方の山間部
でゼンマイ集落を捜し求め、ゼンマイ生産の実

---

25) 淀沢町誌編集委員会『淀沢町誌』、淀沢町、1978、919頁。
26) 清水大典『山菜全科』、家の光協会、1967、37−38頁。
27) 藤田隆三『乾物誌』、食品新社、1981。
28) 上野福男『山菜と人山荘一山村における資源管理とレクリエーションに関連して』、駒沢地理、11、1975、91−96
頁。
29) 大坂昭治『農業・山菜加工の仕方』、板倉善明編『地域産業の町3』、古今書院、1985、14−24頁。
30) 冷水政教『熊本県野良村における農業集落のゼンマイ栽培』(上野福男先生喜寿記念会編『農業地理学の課題』、大明堂、1986、54−68頁。
31) 橋子昭『山菜マイ型栽培法』、農山漁村文化協会、1986、1−110頁。
32) 三井田圭右『東北日本奥地山村におけるゼンマイ生産の実態とその集落維持的意義』、地理学評論、47−6、1974、370−386頁。
33) 福島県『野生資源（サギ）調査結果報告書』、1977、1−40頁。
34) 石井正也・山本正直『近年におけるプチ山菜の山菜利用の変貌—山形県上小国の場合一』、筑波大学人文地理学研究
33、1983、109−132頁。
35) 丹野正也『多雪地域の山村における山菜採集活動について』、季刊人類学、9−3、1978、194−239頁。
36) 三井田圭右『山村振興と山菜一ゼンマイを中心として』、山村振興調査会、1973、7頁。
恵，また商品化の歴史について古い文献に記録されている。（新潟県、秋田県、山形県）

2. 明治後期から大正期にかけてのゼンマイ生産

第1章で述べたように、山菜の生産統計資料は乏しく正確さを欠くけれども、全国のゼンマイの約8割を集めていたといわれる大阪市での調査資料から全国的なゼンマイ生産量の分布を明らかにする。併せて、筆者が現地調査によってその存在を明らかにしたゼンマイ集落におけるゼンマイ生産の実態を、その商品化の時期、山茶経済におけるゼンマイ生産の意義、および前例慣行などから把握する。

（1）最深積雪量とゼンマイ生産地域の分布
大正時代の生産量をおよそ示すものとして昭和5年における乾ゼンマイ生産量の分布を示す（第1図）。

第1図 昭和5年における乾ゼンマイ生産量の分布
（西村健俊『大阪乾物商誌』、888頁より筆者作成）

が産出される。ちなみに、総生産量の10万貫は、三井田が推定した1970年頃の全国総生産高（注28）ともほぼ同じであることから、高度成長期以降の山菜ブームとともにゼンマイ生産量や消費量が上昇したという三井田の見解を再検討しなければならない。

このように、大正期にはゼンマイ生産が広い範囲で行われていたのであるが、次のゼンマイ集落の分布と上記の分布を対比することを試みる。

東北地方におけるゼンマイ集落の分布を第2図に示す。ゼンマイ集落は、北から慈吉、和賀、栗駒、鳥海、朝日、飯豊、越後山麓などの深山幽谷に分布し、広大な国有林が卓越する奥底山

34）①松藤和信『ダレム建設により水没予定にある集落の変容—新潟県南魚沼におけるゼンマイ採集に着目して—』、『東北地理』 36—2、1984、91—104頁。
②松藤和信『多雪地域の山村におけるゼンマイ採集活動と採集ナワバリ』、季刊人類学、20—1、1989、問題中。
35）大正12年発行の山本貞一編『大日本乾物市場調査書』、大阪市役所商工課。をみると、大正時代の全国的なゼンマイ生産量がわかるが、徳島県は7万貫、秋田県は3～4万貫、福島県は4万貫、新潟県は2万5千貫で、合計すると16.5～17.5万貫の生産となり、明治前期の生産量に比べて大幅に増大している。しかし、大阪の問屋の話によると、これは多めに見積もられていて、中でも徳島県の数字は、常識的な数ではないという。そこで、複数の大手問屋の推定値に合う昭和5年の資料を引用した。
第2図 最深積雪量とゼンマイ集落

注1）25、26、28、34～40、45は、ゼンマイ間屋星元三氏、石川金次郎氏からの聞きとりによる。
それ以外は、現地調査により確認する。

注2）気象庁『日本気候図第2集』、1972、Plate 28による。
村である。また、ゼンマイ集落は、北上や阿武隈山地などの太平洋側の農村地域の山地にはみられず、最高積雪量が2m以上の日本海側の多雪地域に広く分布する。なかでも日本有数の豪雪地帯といわれる福島県から新潟県にかけての越後山麓ではゼンマイ集落の密度が高い。多雪とゼンマイ採掘との関係については、ゼンマイが高密度に発生する場所は、雪崩がひっそりとに発生する急斜面であること、雪溶けの跡地で採集が行なわれるので、多雪であることによってゼンマイが出芽する時期が地域的に異なる。長期間にわたる採集がとくに2点を指摘できる（注34）93-95頁。つまり、東北地方のゼンマイは、積雪の恩恵によって成り立っている生業であるといえよう。

（2）ゼンマイの商品化 第2図の48集落中、大正期以降に商品化した集落が、（③）、（④）、（⑤）-（⑦）、（③）-（⑤）、（⑥）-（⑧）、（⑤）、（④）、（③）、（①）、（⑤）の14事例があり、その他のは不明である。ここでは、大正時代にゼンマイを商品として大量に生産するようになった集落の例を4ヶ所とりあげて説明する。

中津川（第2図中の③、⑤を含む地区）では、大正5年（1916）頃、600貫のゼンマイを生産して、300円の収入を得ており、昭和10年（1935）頃になると、2000貫を越え1万円から6万円ぐらいになっている。

室谷（集落番号③）では、江戸時代にアワとヒエによる自給自足の生活が長く続いていたが、明治末期から大正期にかけて商品経済の波が室谷集落にも押し寄せることとなり、室谷ゼンマイが商品として注目されてきた。そのため、南蒲原郡下田村の人が室谷の山で採集をしていたが、大正期になると室谷の人がその場所を独占するようになった。そして、大正10年（1921）頃より室谷ゼンマイとして大阪の加藤徳行ゼンマイ問屋へ全部送られた。取引方法は大阪でセリをし、その値段を電報で確認して、こちらから承知の電報を打つというものであった。ゼンマイは室谷ゼンマイの印のついた木箱に入り、馬の背に清川駅まで6里の道を運んだ。

八幡平山麓の秋田県田沢湖町玉川集落（④）では、（昭和53年に玉川ダムの建設によって全戸が水没）ゼンマイは昔から高値で売られることもあったが、その後は大正時代以降に自家用の副食であった。しかし、昭和10年には、田沢地区におけるゼンマイの生産は609貫で1貫当たり2.5円であり、1523円の収入を挙げている。これによって、大正時代以降にゼンマイが商品化したことがある。

朝日山麓の五味沢（⑧）において、上杉鷹山公は、安永元年（1772）に、松、塗具器、木地などを副業として奨励していた。その後、明治初年でも木地ひきは重要な生業であり、30年代になると養蚕が盛んになり、大正10年頃には養蚕よりも山菜採りが収入として重要になった。なお、この山菜採りは、ゼンマイ採りであることを古くから確認することができた。これから、明治30年から大正10年までの期間にゼンマイが商品化されたといえる。

なお、飯豊山麓の長者原（⑩）では、ゼンマイやワラビを各家庭で必要な量だけ収穫してい
たが、昭和12年からの発電所工事以後に商品として大量に採るようになり、集落としては大きな現金収入になったといわれる。しかし、筆者の聞き取り調査によると、次章で述べるよう、集落中でゼンマイを盛んに生産するようになったのは大正時代の末頃で、ゼンマイの商品化の時期をめぐって問題が残る。また、秋田県の矢島町では、大正時代にゼンマイの売買にかかわる殺人事件があったといわれ、ゼンマイが当時すでに筆者等から重要性の現金収入源になっていたことがわかる。

以上のことから、大正期には商品経済の波が奥田村にも押し寄せ、各地の山村でゼンマイ生産が盛んになったことが明らかである。

(3) 山村経済におけるゼンマイ生産と前例

ゼンマイの値段は、大正3年から8年かけて、10貫当たり20円前後であり（第3図）、1軒の家で平均30貫の干ゼンマイを生産すると仮定すれば60円の収入になる。また、生産者は、冬用の物資を購入するため仲買人から米や現金などを借り、春のゼンマイで返すという前例慣行が広く行なわれた。このように、ゼンマイ生産は、短期間で安定した現金収入を確保できる経済的基盤になりえるが、ゼンマイ集落では、ゼンマイ生産のみで生活を営んでいるわけではない。村民の生業に占めるゼンマイ生産の比重に基づいて、ゼンマイ集落を分類すると、キノコ生産と組み合わせたゼンマイ生産中心集落と炭焼との複合集落とに分けられる。このうち、砂子沢（1）、丸志田（1）、秋ノ宮（10）、小安（9）、松山（8）、百宅（5）、中津川（2）、銀山平（9）などが前者の類型に該当する。以下、それぞれの事例について説明する。

森吉山麓の砂子沢は、昭和29年に森吉ダムの建設によって水没したが、元の戸数は11戸で、水田が少なく、12の山小屋で採集したゼンマイの販売によって得た収入で年間の生活必需品を購入していたという。ゼンマイは、比内町の方へ牛を使って運搬され、ゼンマイを売り終わった頃になると、阿仁前田の町から呉服屋がやって来た。

丸志田では、戦前には山小屋に泊って生活する家が15戸ほどで、ゼンマイの収入で生活していた。正月すぐに米を買うために仲買人から金を借り、春のゼンマイで返す前借が行なわれ、その年のゼンマイ生産額の半分を借りている家もあった。

秋ノ宮の湯ノ岱では、ゼンマイとマイタケが昔から米を買うために重要な現金収入源であった。40戸のすべてがゼンマイ生産に従事しており、そのうち15戸が山小屋に住み込んで生産をしていた。そして、荷馬車で横堀（雄勝町）までゼンマイを運搬して、帰りには米を持ってきた。小安でも、春のゼンマイと秋のマイタケが

第3図 ゼンマイ10貫当たりの値段の推移
（西村健編『大阪鉄物商誌』（1933）567頁より筆者作成。但し、ゼンマイは会津や仙北地方で産した干ゼンマイである。）
昔からの現金収入源で、ゼンマイ生産によって1日に5〜10円を稼ぎ、半年分の生活ができた。森林の伐採や植林の仕事も少しあったが、その場合は一日あたり1円50銭で賃金は安かった。貧乏人は、冬の生活のために前借をして、春先のゼンマイで返した。植山台でも、昔からゼンマイは現金収入源になった。春はゼンマイ、秋はキノコで生活していたが、昭和7年から炭焼を始めた。なお、ゼンマイは、人の骨で運搬された。百宅では、大正12年頃、米1俵が12円の時にゼンマイ1貫は3円50銭になり、ゼンマイ生産だけで15〜20円の収入が得られた。江戸時代から大正の初期にかけては、下駄造りも盛んであった。なお、尾留川は、「（昭和11年の）百宅は、高価で運搬の容易なナメコ・干しゼンマイと絹織品の現金収入で立っており、マタギと百宅万歳で藩政時代以来続いてきた特異な山村としての面影を実に示している」と述べている。

中津川地区の岳谷は、戦前6戸から成る集落で、岳谷の山はゼンマイの自生環境としては適するが植林には不適で、交通不便のため炭焼は発達しなかったという。

銀山平では、昭和初年の頃、山菜や茸は豊富だったが、換金出来るのは木工品の他はゼンマイだけで、ゼンマイに対する力の入れようは大変なものだった。銀山平のゼンマイ採りは4〜6月で、子供も含め働く者はみんな山へ泊まりがけて入る。そのため、小学校は、2、3日か長い時は1週間位の「ゼンマイ休校」を余儀なくされた。また、生活必需品を前借りするとは始終行なわぬ、精算の際に返し切れない人もいった。

以上のように、ゼンマイ生産を中心にキノコ生産なども行なっていた山村では、交通不便なために炭焼が発達せず、ゼンマイ生産が山村の主要な経済基盤になっていた。しかし一方ではゼンマイ生産と炭焼を組み合わせて生計を営む山村が、製造の山村より道路交通に恵まれた山間部仮に分布していた。次に8集落がそれに該当する。

針水（＠）では、12戸すべてが炭焼とゼンマイ生産で生活していた。1貫のゼンマイを売れば、40〜50銭の収入が得られる。時としてそれは大金であり、また仲買人から前金を借り、奉先のゼンマイで返した。

軍沢（いくさざわ）（＠）では、昔からゼンマイは現金収入源であり、集落総出で採集して大阪へまとめて出荷した。仲買人から米や魚を前借する慣行もあった。製炭は、大正時代に農家の副業として始まった。

山熊田（＠）の29戸の家では、収入の半分を約600貫のゼンマイから得ていた。仲買人と前借も行なわれていた。炭焼も生業の一部であり、炭焼きの跡地には、4〜5年ちにゼンマイが自生したという。

金目（＠）では、11戸すべてで行なうゼンマイ生産が、固定した収入源であり、冬は炭焼を行なった。

黒谷（＠）では、ゼンマイ小屋が15軒あり、

47) 小安在住の高橋克弥氏（大正4年生まれ）話（1982年8月19日調査）。
48) 植山台在住の高橋吉男氏（大正2年生まれ）話（1982年8月20日調査）。
49) 百宅在住の齋藤七蔵氏話（1982年7月30日調査）。
50) 尾留川正平「鳥海山東麓における高距集落の林野依存度」（「砂丘の開拓と土地利用」、二宮書店、1981、262頁）。
51) 岳谷在住の小嶋新一郎氏話（1982年8月19日調査）。
52) 北村晃「銀山物語」、新潮日報事業社、1983、159頁。
53) 第 3 図のゼンマイの植種（10貫当たり約20円）からすると、この金額は小さすぎるとと思われるが、その差額は仲買人の収入となっていることを示すと考えられる。
54) 針水在住の小沼未蔵氏（大正14年生まれ）話（1982年7月29日調査）。
55) 植山台在住の高橋誠氏話（1982年8月18日調査）。
56) 山熊田在住の大浦トミ氏（明治30年生まれ）話（1981年9月25日調査）。
57) 金目在住の齋藤弥一郎氏（明治42年生まれ）話（1984年10月30日調査）。
福島県金山町の方へ越焼して採集も行なっていた。炭焼で木を切った跡は、ゼンマイの自生がよかったという。

大江・大谷（小川）の大半の家では、飯米が不足して、製炭のみではどうにもならないので、30日から40日にわたり山払りに行って、ゼンマイ生産で現金収入を得た。また、炭親方と同じようにゼンマイ生産にも、金を貸して製品の引取りを約束する仲買人（“ゼンマイ親方”）がいた。

吉ヶ平（小川）の山は山萊の宝庫で、大正時代には相当の現金収入を山萊から得ていた。大正5年度の樋平太郎氏記念によると、当時の戸数は38戸で、木炭から750円、ゼンマイから350円、マユから300円、子馬から200円を得ているのがわかる。ゼンマイは、木炭の半分近い収入であった。

松川（小川）では、炭焼とゼンマイ生産で生活していた。生産者は、黒又川の上流の山小屋に1か月近く住み込むので、親方と呼ぶ仲買人にゼンマイを出荷した。大塚與三郎氏の場合は、親方の故風間久作氏から冬の生活資金のために前金を借り、春先のゼンマイで返したが、ゼンマイで払いきれない時には秋の炭焼による収入で返したという。

以上のような集落では、ゼンマイ生産と炭焼を組み合わせて生計が営まれていて、炭焼のために木を伐採した跡地は、ゼンマイのよりよい自生環境をつくっているなど相互の関係をもっていた。

また、ゼンマイ生産中心集落にも共通することであるけれども、生産者と仲買人の間に前借慣行がみられた。筆者が聞き取りによって確認できたのは、16ヶ所である。なかでも、大江・大谷および松川では、炭親方と類似したゼンマイ親方が存在した。これは、生産者と仲買人との関係がより親密であることを示す。こうしてゼンマイは、半年間は雪に閉ざされる山村住民にとって重要な商品であったといえる。

III ゼンマイ生産地域の形成要因

ゼンマイ生産地域は、山村住民の自発的行動で生まれたり、あるいは山村外部からの仲買人が产地を開拓することをきっかけに形成される。また、そのような行動は、日本経済の動向とは無関係ではない。そのため、旧産地の縁辺部でみられる山村住民の自発的行動（第4図中A）と旧産地の遠隔部、即ち新規産地での仲買人の開拓行動（第4図中B）の2つに分けて記述し、併せて都市における需要の増大と鉄道網の拡大との関連から産地の形成要因について考察する。

（1）山村住民の自発性と仲買人の開拓
ここでは、朝日、飯豊、越後山麓に分布するゼンマイ集落をとりあげ、そこでの山村住民の自発的行動や仲買人の行動を通じて、地域形成の過程を描く。第4図の集落番号②から⑧は、
江戸時代末期にゼンマイが生産されていた集落で、旧産地と呼ぶことにする。また、集落番号③、⑤、④は、旧産地に隣接し、大正時代に生産地となった新産地である。そして⑧から②の住民は、矢印で示すように境界の尾根を越えて、
③、⑤、④の山で採集していた。ここでは、④の生産を事例にして、どのようにゼンマイ生産が開始されたかを述べる。以下、明治36年生まれの故五十嵐卯三郎氏からの聞きとりによる。

明治時代に、藩主の山でゼンマイ生産をしていた越後の人は、5月初めに何人かに小屋がけをして青干ゼンマイを製造した。そして、6月の終わり頃になると、山代金を山中に置き、八十里越と呼ばれる道を通い、越後までゼンマイを運搬した。当時、藩主の住民は、集落の近くの山で採集したゼンマイを赤干に加工して、若松方面へ少量だけ販売しているにすぎなかった。ところが、明治30～35年に若松からの道路が藩主まで通じ、そこを馬車が通るようになると、越後の人は若松の商人にゼンマイを売るようになった。これを覚えていた藩主の住民は、大正2年頃から越後の人からやって青干を製造し、若松方面から来る商人に買ってもらった。そのとき、ゼンマイは価段が高く、よく売れたことが知られ、それ以来ゼンマイを大量に採るようになるとともに、越後の人は藩主の山から締め出すことになった。当時、2年分のゼンマイを金持ちの所へ持っていくと家を建てて行ったという。現存するx氏の家は、2年前のゼンマイ生産で得た300円で建てた家である。またゼンマイの利点は、米や金などを仲買人から借りられる点で、どれだけ生活が助かったことかわからないという。

このように、大正2年以前、藩主の住民は少量の赤干ゼンマイを若松方面へ売るだけであった。ところが、大正2年頃になると、藩主の山で採集していた越後の人間に青干の加工技術を習うことによって、自分たちも青干ゼンマイの生産を開始し、越後の藩主の山から締め出した。つまり、旧産地に隣接する藩主では、地元住民が自発的に生産を開始したわけであり、「山村住民自発的」といえる。また、これと同様な形成過程は、室谷（⑧）、入野津・日津（⑥）にもみられる。

一方、旧産地の遠隔地では、仲買人の行動をきっかけとして産地が形成されている。三面（⑨）、長者原（⑩）を事例にして、仲買人W1・W2の行動を通じてその過程を把握する。大正4・5年頃、仲買人W1（弁護士林蔵氏は、江戸時代からのゼンマイの集散地三条市大町に住み、当時の銅貨、道路事情などから三条から坂町では鉄道を使い、そこから小国町の舟渡（ふど）までを馬車を利用して、さらに三面までの約16 kmを歩いたと推察される。そして、青干（「アオセ」）という加工方法を住民に伝え、ゼンマイの買い付けをした。この時に、ある村人夫婦は、小屋をかけて青干ゼンマイを生産して20日間で60円の収益をあげたために、地

62) 下田村史編集委員会『下田村史』、下田村史刊行委員会、1971、135-136頁。63) 千葉徳嗣『山地における狩猟部族の伝承について』、歴史地理学、112、1981、22頁には、山中を行動する狩猟者にとっては、平地人が境界にみずから分水山地を一つの行動領域として、そこででの活動でも反対側の住人と共同狩猟や小屋屋での共同宿泊の機会が多いと記されている。このことから、⑨から⑮までの集落でも狩猟は古くから行なわれており、隣接集落の住民に接する機会は多かったと思われる。64) 渡辺林蔵氏の息子（林蔵氏）及び妻・ヨキさんの通訳を通しての聞き取りによると、林蔵氏は、三条市大町の高橋ハンシチ氏の後を引き継いでゼンマイの仲買を務めて、昭和9年に死亡したという。その後、彼は、三条住民が第1弾していた金を集めに行ったことがある（1984年8月9日調査）。また、佐々木・日「新潟県朝日村における山菜の役割」、筑波大学人文地理学研究、Ⅳ、1988、50頁。では、林蔵の息子及び妻の聞き取り結果であるので参照されたい。
元民を驚かしたといわれる。ちなみに、当時血気盛んな若い衆の日当が1日当たり30銭であることから、この60銭は若い衆が約半年分稼いだ金となる。その後村を囲んで生産するようになり、ゼンマイの値段は、1貫（約3.75 kg）当たり3銭50銭まで上昇したという。なお、大正10年頃、植株が1束の生ゼンマイを採集して、4銭の小遣いを得ている。

小国町の長者原では、自給用のゼンマイを採集していたが、明治44・45年頃に、祖父（故佐藤くまじ）は、昔からブナの木で作る鉤の柄を売っていた村上（新潟県村上市）のオオギソさんが（第4図中 W2）からゼンマイ生産は高収入になると考えて、本格的に生産を開始した。また、小学校3年頃には、ゼンマイの絹をとり除く作業を手伝うことによって、1貫目（約3.75 kg）当たり1銭の収入を得た。そして、当時は集落で10人くらいしか採っていなかったけれども、大正の末頃になると集落中で生産を始め、中には反対上がり80貫のゼンマイを生産した人もいるが、1戸当たりの平均はおよそ30貫であった。昭和12年からは、発電所工事の仕事があり、その日当は70銭であるのに対して、ゼンマイ生産に従事するとそれらの3倍以上稼げた。

このように、長者原では、村上の商人 W2 の行動がひきがねとなって産地が形成された。しかし、この W2 は、それ以前から鉤の柄を住民から買っていったのが、上述した三面の W1 とは異なっている。なお、ある住民が生産を開始してから集落中に広まるまでに10年近い年月を費やしている。

以上のようにゼンマイ生産地域は、旧産地の縁辺部では、その影響を受けてゼンマイを生産しようとする住民の自発的行動により形成され、旧産地の遠隔部では、仲買人が産地を開拓する行動によって形成されるといえる。なお、旧来の産地が存在しない四国の山村では、後者の型によって産地が形成された。

（2）都市における需要の増大と鉄道網の拡大
ゼンマイは、主として京都や大阪を中心とした関西地区で消費された。中でも青干ゼンマイは、主として京都で消費され、仏事の際の精進料理に必ず用いられるだけでなく、日常食としての、ゼンマイと油揚の煮つけにも欠かせなかった。例えば、京都の物産関係の村川伊三郎氏は、大正の初期ごろに、新潟県三市の金山呉七商店からゼンマイを仕入れ、京都の料理店、寺、小売店などに売っていたという。当時ゼンマイは、京都・大阪の都市住民に広く需要されていたことようかがえる。そのため、都市における需要量を直接示す資料は現時点では入手していないが、都市人口の大小さ、およその需要量を示すものと考える。

明治初期から大正期にわたる京都市と大阪市の人口の推移をみると、両都市の人口とも明治5年から明治20年頃まで30万人前後で安定しているが、明治20年代からは人口が急激に増加して、大正10年の京都市は約60万人、大阪市は約130万人にも達している。このような明治後半から大正期にかけての急激な人口増加によってゼンマイの需要量も同様に増大したと推察され

65) 朝日村教育委員会「朝日村の民俗Ⅱ」，1978，321頁。
66) 三面在住の小池メヤさん（大正4年生まれ）談（1981年12月21日調査）。
67) 長者在住の佐藤とよいさん（明治35年生まれ）が小学校の頃の話（1984年10月27日調査）。
68) 大阪で幹物商を営む後藤氏の祖父が、大正時代に四国のゼンマイを商品化したという。また、高知県や徳島県の生産地では、東北の山村とは異なり、ゼンマイを食料の一部にしていなかったという。
69) 村川伊三郎氏の店で働いていた京都市在住の今村かつさん（大正2年生まれ）が、明治35年生まれの人に聞いた話。
70) 明治初期の人口は、高橋勇男「近代日本の都市状況—明治初期の都市—」，東京学芸大学紀要，34，1982，21-24頁，による。
る。なお、日清戦争以来の米需食として、乾燥や高野豆腐などとともに長期間の保存がきくゼ
ンマイの需要が伸びたともいわれる。こうして、
京都市の間屋は、前節で述べた三条市の仲買人（W₁）に、奥地山村のゼンマイ資源を商品とし
て開拓するよう促したと推察される。
一方、明治31年には、北越鉄道（後の信越本
線）が全線開通し、大正3年には岩越線（後の
篠越西線）、大正13年には羽越線が開通している
（第5図）。それによって、各地の商人が産地
へ乗り込んで直接買付するようになったといわれる。
例えば、三条における先述した三条市の仲
買人（W₁）の行動は、大正3年に新津から村
上まで延びた羽越線の影響を受けていると考えら
れる。
このように、鉄道開通によって交通が便利に
なり、商人が奥地の山村まで容易に行けるよう
になっただけでなく、産地から消費地までのゼ
ンマイの輸送能率が上昇した。例えば、大正12
年の大阪市乾物市場調査書によると、横手、三
條、長岡、越後北魚沼町、若松の各駅から大阪
駅までゼンマイが送られている。こうして、輸
送時間が2〜3ヶ月もかかる船遅の時に比べて、
その時間が非常に短縮されたといえる。

IV まとめと考察—日本の奥地山村の地域分
化をめぐって

以上、明治・大正期の東北地方の奥地山村に
おけるゼンマイ生産の実態、ときに商品化の過
程と生産地域の形成について考察した。その結
果、次の2点が明らかになった。
①明治後期から大正期にかけて、日本海側の
多雪地域にゼンマイ集落が形成された。それら
は、森吉、和賀、栗駒、鳥海、朝日、飯豊、越
後山麓に分布する奥地山村である。また、この
ゼンマイ生産は、山村の住民からみれば経済革
命であり、短期間で安定した現金収入を確保で
きるだけでなく、米などの冬期間の物資を借り、
春先のゼンマイで返すという前借慣行を生んだ。
②このような生産地の形成は、近世からの古
い産地の縁辺部では地元民の自発的行動により、
また旧産地の遠隔部では仲買人の開拓行動に負
うところが大きかった。その行動を促した背景
には、人口の都市集中化とともに京都會および
大阪を中心とした需要の増大と鉄道網の拡大な
どにより、交通の便がよくなったために、奥地
山村まで商人が行きやすくなったことが挙げら
れる。
なお、大消費地に近く、同じ多雪地域に位置
する北陸3県の山間地には、一部の事例を除いてゼンマイ集落が認められない。これは、ゼンマイ資源が乏しかったこととともに、養蚕業および製糸業により現金収入を得ることができたためと考えられる。

最後に、明治から大正にかけての日本の奥地山村の商品経済化に伴う地域分化について、冒頭で述べた従来の研究成果に、筆者がここで明らかにしたゼンマイ産地の存在を新たに加えてまとめると、第6図のようになる。

これに対し多雨な気候と急峻な地形が組み合わせた西南日本外帯の奥地山村では、山茶や三樫が重要な商品となり、一方、多雪な気候と急峻な地形からなる東北地方の日本海側の奥地山村では、ゼンマイが商品となった。山茶は、暖温帯の焼畑の跡地に高密度に自生する雑生植物で、三樫は他の作物をもってしても利用し得ぬ山岳急峻地に適地となり、多雨性に三樫の成育に良好な条件になるといわれている（注20）③23-24頁）。一方、ゼンマイは雪崩植生地に高密度な自生をする。このことから、いずれの商品も地域の自然条件に適応しているのがわかる。

また、山茶の摘葉時期には、小中学校が一斉に農耕休業を実施するのと同じように（注17）②155頁）、三面、山熊田、銀山平などのゼンマイ集落にも、ゼンマイ生産の盛期には小中学校のゼンマイ休暇が存在した。三樫栽培にても、5月を頂点に4月から6月にわたる繁忙期が形成される（注20）③26頁）。いずれも、ある時期に山村の家族労働力を集中する商品であるともいえる。

以上のことから、地域の自然条件と社会経済条件とのかかわりの中で、地域に特徴ある産物が商品化化してきたのは明らかである。つまり、上田は、山村の商品的生産物として選ばれるものは山地交通の制約に基づき、軽量で運搬保存に便利であり、且つ特に山地の自然条件に適した物か、又は平地に於ても生産し得るが山地の方が地価、労賃が低いため、運賃を加算しても平地に於て競争し得る様々な物であると述べているが、この時期のゼンマイ、山茶、三樫が前者に、耕後者に当てはまる。

なお、藤田は、西南日本外帯の山村は水田も乏しく、まさにわが国の山村のうちでも山地資源に依拠したもっとも山村らしい地域である

---
73）河内村史編集委員会編『河内村史』上巻、1981、688頁・845頁。によると、白山蠡の河内村板尾では、ゼンマイは昔から大切な現金収入源であり、河村内尾の奥田では、大抵の果が、このゼンマイで1年中の米を購えと記されている。
74）上田信三『日本山村経済地理研究概説』地理学雑誌、15-1、1939、1-16頁。
75）藤田佳久『日本の山村』、地人書房、1981、270頁。
Formation of a Zenmai Producing Region in the Remote Mountain Villages of the Tohoku Region: An Example of Commodity Production in the Remote Mountain Villages from the Late Meiji Era to the Taishō Era

Kazunobu IKEYA

The purpose of this paper is to clarify the distribution of zenmai producing regions and their formation in the Tohoku region during the late Meiji and Taishō Eras. The young shoot of the fern zenmai (Osmunda japonica) is a traditional edible plant in Japan. Zenmai is distributed densely in the steep slopes of mountains which receive heavy snow. Therefore, zenmai of good quality has been produced in mountain villages of Tohoku facing the Japan Sea. The present writer identifies "zenmai settlements" where zenmai producing is economically important to village life.

This paper is based on 50 days field research in the mountain villages of Tohoku and Hokuriku from August 1981 to October 1984. The author conducted oral research among many old people, and gathered a lot of information from brokers and wholesalers about zenmai producing and circulation.

The results can be summarized as follows:

The zenmai producing region expanded from the late Meiji Era to the Taishō Era, and the zenmai settlements appeared in the snowy region facing the Japan Sea. They were distributed at the foot of the Moriyoshi Range, the Waga Range, the Kurikoma Range, the Chōkai Range, the Asahi Range, the Iide Range, and the Echigo Range. (See Fig. 3.) This zenmai production brought people a secure income of a lot of money in about one month of each year. The custom of Maegari also arose, in which brokers advanced rice and other staples to villagers each fall in exchange for zenmai deliveries the next spring.

The formation of the zenmai producing regions was caused by two trends. First, village people close to the old producing regions spontaneously began to produce zenmai upon learning of its value. Second, brokers began to visit places distant from the old producing regions and advise village people to produce zenmai and sell it. These two behaviors were...
stimulated by the increase of demand as population grew in the cities, and by merchants' easy access to the remote mountain villages with the completion of the railroad network.

From the above, we can see how the mountain villages of Tōhoku facing the Japan Sea, having difficult access to markets, were drawn into commodity production of zenmai, a light and expensive food formerly gathered in the wild. This pattern is similar to the development of specialized commercial production in conjunction with shifting cultivation in other remote and mountainous parts of Japan: wild tea in Kyūshū, Mitsumata (for paper making) in Shikoku, and sericulture in Central Japan. This shows the development of a commercial economy through particular products in the remote mountain villages of Japan.